

結桶師
桶屋

同 中

同百四拾八文、但八文下直相成申候、

杉赤身上

同百七拾貳文、但八文下直相成申候、

同 下

同百貳拾四文、但六文下直相成申候、

一猿ぼう

榎白太入上

同百拾文、但六文下直相成申候、

杉 下

同百文、但五文下直相成申候、○中略

一荷ひ桶

杉榎底中

同百文、但五文下直相成申候、○中略

榎白太入

同九拾壹文、但五文下直相成申候、○中略

右は今般錢相場金壹兩ニ付六貫五百文御定被仰渡候ニ付、桶類直段右ニ准じ、前書之通爲引下
ダ申候依之此段奉伺候、以上、

寅八月

拾三番組諸色掛

下谷坂本町

名主

傳次郎印

〔饅頭屋本節用集^四人倫^{ニイ}〕結桶師

〔三十二番職人歌合〕十三番 左

結おけし

春はまづ柳のおけをいざ結てかうじ花をもめにあげてみむ

二十九番 左

結おけし

竹ならぬ心はまげじ桶ゆひて世をまはる身は正直にして

〔人倫訓蒙圖彙^六〕桶結

輪 輪がへにふれめぐる言葉所々にてかわりあり、京にてかづらとい

ふはむかしは藤かづらにて結しゆへなり、江戸のたがといふは、輪を多くくわゆるの心也、國々にてかわりある也、

〔雍州府志^七土産〕桶屋

凡外圍繞片木、内以板爲底、別割青竹二條互纏之、以是爲輪、約束片木圍繞之